

暖かくしたたる空の光よ

学長 水谷 幸正

現代の世界史的な視野で仏教を受けとめるならば、戦前は西洋人にとつては、それが主として学問の対象であつたが、戦後、とくにここ十数年間は学問の対象というよりか、人類の普遍的な指導原理として重要視されている、といつてよい。

いうまでもなく、一口に仏教といつても、その間口も広く、その奥行は甚だ深い。甚深微妙の法である。では、その根本哲理は何か。あるいは無我といい、無常といい、縁起といい、空という。そのほかさまざまな表現がなされている。どれもみな、仏教思想の核心をつくものである。

数千巻の經典は、それぞれそれなりに、その核心を説き明かすものであるが、その心髓を小文で纏めたものとして『般若心経』がひろく尊重されている。「観自在菩薩行深般若波羅蜜多……」ではじまる経文は、仏教に関心のある者なら、たいいていの人は知っている。とくに、色即是空・空即是色は経文の極意を示めすものとして有名である。

仏教經典の現代語訳はなかなか難しい。仏教の極意を説く『般若心経』にいたつてはなおさらである。ところで、最近ある機会に、かつて本学の教授であつた小笠原秀実先生のすばらしい意識に再見することができて、いまは亡き先生の非凡の勝解に感服するのみであつた。このことについては、すでに「鷹陵」第八三号において紹介したが、小笠原先生はその深い学殖を内に秘め一見飄々とした孤高

の風格をもった哲学者であり、また歌人でもあった。前学長藤原了然先生は心から尊敬の念をもって、講話や小文でよく紹介しておられた。お二人のお人からは相通ずるものがあつたように思う。色即是空・空即是色の境地が相通じていたのではなからうか。いまこの名訳を少しでも多くの人に味読して頂きたい願いから、あえて左に掲載する次第である。

般若心経意

形あるものはすべてこわれて行く、花のように人のように樓閣のように

されど形なきものは虚空のように大空のように、いつまでも壊れることを知らない

形あるすべてを捨てた心、かわり行くすべてを離れた心、それが空の心である

緑の大空のように、空の心は限りもなく、涯もなく、増えることもなく、減ることもない

壊れゆくこの世のすべてを離れるが故に、生きることに迷わず、躓くことにも惑わず

ただすべての畏れを離れる

若葉にしたたる日の滴が、すべてを包み、すべてをはぐくむように

空の心は、何ものをも許し、何ものをも育て行く

それは限りなき楽しみであり、無我のさやけさである

ほがらかなる空の心よ

暖かくしたたる空の光よ